

能古見の歴史を歩こう



アクセス ACCESS 能古見公民館 (のごみふれあい楽習館) まで



【車でお越しの場合】

◆佐賀市内より 約50分

《高速道路(長崎自動車道)利用》

福岡市内 能古見 長崎市内
約100分 約60分

◆武雄・北方 I.C 下車 約30分

◆嬉野 I.C 下車 約20分

【JRでお越しの場合】

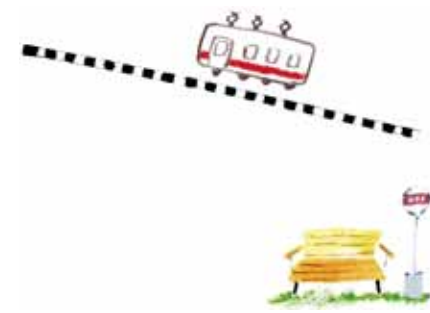
◆JR 長崎本線肥前鹿島駅下車...車で約10分

《JR特急+祐徳バス利用》

JR 博多駅 JR 肥前鹿島駅 JR 長崎駅
約60分 約60分

鹿島バスセンター ... 大井手 下車
約10分

能古見(大野・尾崎)方面に乗車



《能古見地区の航空写真。この地域一帯が「能美郷」であったと思われます。この地域は、中川、鹿島川、石木津川、浜川などの流域に開けた扇状地です。》

鹿島市の面積の1/2以上を占めている能古見地区の歴史は古く、はるか昔の奈良時代に編纂された『肥前国風土記』にその地名が記されています。

～「昔、景行天皇が行幸されたとき、この里に三人兄弟の土蜘蛛がいた。名は、大白、中白、少白。この三人は砦をつくり、天皇に降伏しなかった。そこで、天皇は紀直らの祖、釋日子を派遣して討伐しようとした。三人は『叩頭て』罪を詫びた。よって、この地を『能美郷』という。」～

この能美郷は、現在の能古見より広い地域だったようですが、能古見という地名は、能美郷が変化したものと思われます。能古見には、蓮厳院をはじめ、多くの史跡が残っており、そのことから能古見が奈良～平安時代の文化の中心であったと推測されます。また、現在も続く庚申講など、民俗学の宝庫でもあります。

そんな能古見の各地区を紹介するMAPを作りました。ゆっくりと散歩しながら、能古見の古い歴史に触れてみてください。



の ご み へん せん ◎ 能古見の地名変遷

古代 (奈良～平安時代)

のみのさと

能美郷

ひぜん

のく^にふ^どき
「肥前国風土記」(奈良時代の地誌)・「和名抄」(平安時代の辞書)に書かれています。現在の能古見地区よりも広く、郡家(役所)所在地と推定される納富分も郷内であったようです。

中世 (鎌倉～戦国時代)

の

ご

み

能古見

ふじつぐん

ふじつのしょう
藤津郡藤津荘のうち。弘長 2 年(1262)「八天神社文書」の寄進状が初見です。天正 5 年(1577)龍造寺隆信・鎮賢連署知行宛行状に「藤津郡能古見庄鳥坂村の内七十町」とあり、宇礼志野右衛門太夫(嬉野元可)に領地を与えています。

近世 (江戸時代)

の

ご

み

ごう

能古見郷

(能古見庄、能込郷とも)

てんぽう

佐賀藩の農村支配のために設けられた行政区画の 1 つです。天保 3 年(1832)の鹿島私領村々畝数石高帳(所領の生産性の帳簿)によると、能古見郷は、中牟田村、犬王袋村、世間村、五丁分村、小舟津村、八本木村、啓浦村、大村方村、久保山村、古枝村、中尾村、馬渡分村、井手分村、末光村、執行分村、行成村、納富分村、大殿分村、若殿分村、横田村、高津原村、三河内村、浜町、鮎越村、両岩村^{もろいわ}の25ヵ町村で、現在の鹿島市の大部分にあたります。

近代 (明治5年～昭和29年)

やまうら

み

かわち

山浦村・三河内村

(明治5年～)

はいはんちけん

明治 4 年(1871)の廃藩置県にともない、地方組織が整備され、江戸時代の郷村を統合したものが村と呼ばれるようになりました。能古見地区においては、南川村、大殿分村、筒口村、川内村、構村、山浦村、野口村、白鳥尾村、本城村、大川内村、花木庭村の11村が統合して山浦村となりました。また、三河内村、浅浦村、伏原村の3村が統合して三河内村となりました。

の

ご

み

能古見村

(明治22年～)

おおあざ

山浦村と三川内村が合併してできた村です。旧村名を継承して、大字山浦と大字三河内の 2 大字で編成され、現在も使われています。当時は県内屈指の大村で、村内は17の区に分かれ、南川・筒口・大殿分・川内・山浦・白鳥尾・大川内・本城の 8 地区が山浦谷に、大木庭・東三河内・西三河内・中川内・早ノ瀬・大野・広平の 7 地区が三河内谷に、伏原・浅浦の 2 地区が浅浦谷にそれぞれ集落を形成していました。

昭和29年(1954)に鹿島町、浜町、鹿島村、古枝村と合併し、鹿島市の一部となりました。

鹿島市 (昭和29年～)

ちぎょうち ◎ 江戸時代の鹿島の知行地

能古見の大部分は、鹿島藩領でしたが、伏原は蓮池藩領、浅浦は嬉野私領、南川・川内・山浦・白鳥尾は深江私領にそれぞれ属していました。



◎ 絵図で見る昔の能古見



げんろく

ひぜん

いちこく え ず
元禄・肥前一国絵図(部分拡大)

※佐賀県立図書館蔵



の

こ

み

ず

能古見図

※鹿島市民図書館蔵



ろくじょうがわ え ず

鹿城川絵図(部分)

※高津原区蔵

【黒川～浅浦川流域エリア】 (伏原・浅浦)

現在も黒川橋付近まで潮が来ることから、昔は「浅い入江」であったと考えられ、浅浦という地名もこれに由来すると思われます。大輪谷の山頂付近には海上交通の守り神である金毘羅さんが祀られていて、浅浦に入ってくる船の安全を祈っていたのでしょう。



2 ぐんざんつつみ
郡山堤



ふし わら 伏原

式本黒木、三本黒木、壹本榎、壹本黒木、幸福寺、大岩、弓場谷、弥勤、次弥勤、鳥附、長五郎、二本榎、四本黒木、三本谷、式本谷、壹本谷の16小字からなります。

江戸時代は、蓮池藩領で塩田郷に属していました。万延元年(1860)改の郷村帳を見ると、御番所の印があります。この地は、鹿島藩・浅浦を知行していた嬉野氏、そして蓮池領との境目となるため、蓮池の番人がいたものと思われます。

1 せんじゅかんのん こうぼうだい し ぞう 千手観音・弘法大師像



あさ うら 浅浦

下浅浦は、倉谷、郡山、成清、五反田、竹ノ下、猶原、山中、正金、大谷の9小字。

中浅浦は、大溝、畑田、塚原、谷口、馬場、大輪谷、三源寺の7小字。

上浅浦は、八ツ枝、徳永、長者原、春木、清地庵、野方、桂木、本越、岩屋、佛谷、板ノ坂、ウナメ、古湯の13小字からなります。

江戸時代、平坦部の大部分は佐賀本藩領で嬉野氏の知行、山林は鹿島藩領でした。嬉野氏の知行になった理由は、龍造寺隆信の藤津攻めの際に忠功があったため、天正5年(1577)嬉野元可が鳥坂村のうち、70石を与えられたことによります。(嬉野家文書)

3 さんかいばんれいとうじぞうぼさつりゅうぞう 三界万霊塔地藏菩薩立像(市重要文化財)

元光寺から南へ約800m下った道雀墓地の入口に安置されている石の仏像です。元光寺の住職が過去・現在・未来の諸仏の幸せを願い、人々の賛同を得て、金剛経全部を小さな小石に1字ずつ書写して地中に埋め、その上に建立したものです。制作は肥前の名工として知られた、牛津砥川の石工平川与四右衛門が元禄9年(1696)に彫像したもので、石造工芸史上も価値が高いものです。



4 く せ じんじゃ せきぞうこまいぬ 救世神社・石造狛犬(市重要文化財)

救世神社は、嬉野元可が味島神社(嬉野市塩田町)の神霊を分祀したと伝えられ、元和3年(1617)の創始とされますが、詳細は明らかではありません。

社殿には、元和2年(1616)に寄進された1対の肥前狛犬が安置されています。表情や体の構造が大胆に簡素化され、ユニークで素朴な形状をしています。彫像年代の明らかな肥前狛犬では、県内でも最古の部類に入るものです。

毎年9月23日の秋祭りには、浅浦の面浮立が奉納され、10月下旬に開催される三嶽神社例大祭では、三嶽神社の下宮として神輿の行幸が行われます。



5 こん び ら 金毘羅神社 こん び ら じょうあと (金毘羅城跡)

浅浦の集落背後の山の山頂近くに祀られた金毘羅さんです。ここからは有明海や大牟田までが一望できます。山頂には、15世紀以前(南北朝～室町時代中期)に作られたと考えられる山城の痕跡(金毘羅城跡)が残っています。



6 げんこう じ 元光寺 そうとうしゅう (曹洞宗)

江戸時代に浅浦一帯を領有していた嬉野氏の菩提寺です。元光寺を創立した嬉野元可は、鎌倉時代から嬉野に土着した在地土豪の一族です。元可は、天正4年(1576)の龍造寺氏による横造城攻略の功績により、能古見庄の鳥坂村の内70町、つまり現在の浅浦地区周辺を与えられ領有しました。



嬉野元可は、浅浦の地を豊かにするために、産業の振興に取り組んだことから、浅浦地区では神格化され祀られています。元光寺の境内には安永6年(1777)の「元可大明神」の石祠と、天保2年(1831)の「元可神廟碑」の石碑があります。浅浦地区では嬉野元可の遺徳をしのんで毎年元可祭が開催されます。



嬉野元可肖像 ※元光寺蔵



元可神廟碑

7 あさうらうれしの し ぼ ち 浅浦嬉野氏墓地の ひとがた ぼ せき ぼ 人形墓石墓 (市重要文化財)

元光寺の裏山にある嬉野氏の墓地には、歴代当主の墓塔が建ち並んでいて、その中の5基は人形の墓塔が方形の石積みの基礎の上に安置されています。嬉野元可の墓塔も人形墓塔で「自雲元可居士 寛永三白内寅四月十五日」(1626)とあります。このような人形墓塔は県内でも極めて珍しく、市内にも例がない貴重なものです。



嬉野元可墓石

あさうらじんばちがさ 浅浦甚八笠

竹の骨組みに竹皮を交互に重ね合わせ、竹ヒゴと糸とで編み上げた笠で、日傘や雨傘として使用されます。浅浦領主の嬉野元可が生産を奨励したとも伝わり、古くからの浅浦地方の名産品となっています。

かつては九州一円を販路としていてかなりの収益をあげていました。



8 あり おじょう ぎ び ざんじょう 蟻尾城 (蟻尾山城)

標高192mの蟻尾山の山頂に築かれた戦国時代の山城です。古い記録では在尾山や有尾山とも書かれています。鹿島藤津地方においては最大規模(東西約420m×南北約130m)をほこり、鹿島平野から佐賀平野までを一望できる立地にあり、戦略拠点として重要な役割を担っていたと考えられます。



浅浦側からみた蟻尾城



蟻尾城縄張図

佐賀県の中近世城館第3集(佐賀県教育委員会2014)より

あさうら めん ぶりゅう 浅浦の面浮立 (市重要無形民俗文化財)

江戸時代から伝承され、今日まで300年あまりの歴史を持つ面浮立です。毎年9月23日の秋祭りに、上浅浦の古湯堤より約5kmの道程を、水神・氏神に奉納し、最後に浅浦地区の鎮守である救世神社の境内で奉納されます。

浅浦面浮立は他地区に比べ曲目が多いのも特徴で、重心を落とし、力強い踏み歩みを主体とする母ヶ浦の面浮立系統に属すると言われています。

9 ふるゆつつみ 古湯堤



【中川～木庭川～ 早ノ瀬川流域エリア】

(大木庭・東三河内・西三河内・
中川内・早ノ瀬・大野・広平)

中川および本城川と木庭川流域谷間に位置しています。河川の浸食によって形成された谷間の水田は、一般的に「かわち」と呼ばれ、この谷の名もこれにちなむと考えられます。各所から縄文・弥生時代の石器や土器が発見されています。



おおこば 大木庭

大井手、塚原、松山、國末、田中、深山、三山の7小字からなります。

木場(木庭)とは元来、貯木場もしくは木材の切り出し場のことで、この地名もそれに由来します。木場は海や川に面していて、それは木材を海路で運んだり、上流で切り出した木をそのまま川に流したりするためですが、大木庭もそうであったと思われます。

安政5年(1858)の着到帳によると、侍5、中小12、歩行23、被官3、小道具2、足軽49の武士が居住していました。

まつやまじんじや まつやまごんげんじや 松山神社(松山権現社)

大同元年(806)にこの地の氏神として創建されたと伝わります。参道には肥前鳥居(年代不明)があります。境内にある光明真言の梵字を刻んだ自然石碑は市内唯一の珍しい事例です。また、由緒などは不明ですが、針葉樹の一木から彫りだした如来形の木造神像が伝わっており、調査の結果、平安時代(12世紀)まで遡る貴重な資料であることが分かりました。



ひがしめかわち 東三河内

本森、白丸、三十石、高仙寺、八名、久右エ門平、諸干の7小字からなります。

がんしょういん じょうどしゅう 岩松院(浄土宗)

寛永8年(1631)創立。木庭村の郷土木庭茂吉は3代藩主鍋島直朝に仕え、その子岩松丸の養育役となったので自らの邸宅を住居として献上し、代わりに高津原に土地をもらいました。しかし、岩松丸が若くして亡くなったため、その菩提を弔うために岩松院としたと伝わります。能古見出身の画家、雲谷等顔の子、



等益や、孫の等藩作とされる絵画も伝わっています。

みやまかんぜおん 10 深山観世音

能古見村誌に「この地は昔勅願寺金剛勝院への勅使に随行せし僧が錫をとどめて法を修し、観世音を本尊として建立した跡」と伝わります。中世の石塔のほか、この庵を再興した原弾右衛門忠時(牧印)の墓碑石が建っています。

もろぼしつづみ はなこばつづみ 12 諸星堤 13 花木庭堤

諸星堤は中川右岸の台地上の開発を目的として、鹿島藩3代藩主鍋島直朝が築いた堤です。上堤・下堤の2つからなり、下堤には昭和62年に八ヶ村水利組合による改修記念碑が建っています。花木庭堤は6代藩主直郷の時代に新たに築かれたものです。

14 タンジャー墓(探題墓)

字三十石の鹿城川を渡ったところに、地元の人々がタンジャー墓と呼ぶ場所があり、16世紀後半～17世紀前半の有耳五輪塔が立ち並んでいます。九州探題であった渋川氏の末裔の墓塔とも伝えられ、近くには探題屋敷と呼ばれる場所もあることから、この地に逃れてきて隠棲した渋川一族の居館跡ではないかとされています。



にし み かわ ち
西三河内

桜、郷野、三嶽、吹野、川原田、湯谷、池田、山口の8小字からなります。

字三嶽にある三嶽神社は、創建が奈良時代にさかのぼるとされる古い神社です。蔵王権現ざおうごんげんや吉野水分神よしの みくまりのかみを祀り、この地方の氏神となっています。

16 ば ば しゅぞうじょう
馬場酒造場(佐賀県遺産)

寛政7年(1795)創業の酒蔵で、この地域の地名にちなんだ銘柄「能古見」を醸造しています。建物は、明治初期以前の建築と考えられる木造2階建ての第一蔵をはじめ、お酒の製造工程に合わせて複数の蔵が連続して敷地内に配置されています。中川のほとりに位置しており、仕込み時期に酒米を蒸す蒸気が勢いよく立ち上る姿は、緑の山々に囲まれた能古見峡の風景とも調和し、地域の代表的な景観となっています。



18 いわおばし ひ
巖橋の碑

三嶽神社の参道の先、木庭川と本城川が合流する地点に、かつて「巖(岳)橋」と呼ばれる石造りの眼鏡橋めがねばしがかかっていました。昭和37年(1962)に鹿島地方を襲った7・8水害により流域のほとんどの橋が流失した中でも、強固な巖橋は流失を免れました。

巖橋は、広平・大野方面からの物資を輸送するための重要な橋として築造に着手され、三河内の石工・山口梅吉やまぐちうめきちがその任にあたり、明治28年(1895)に完成しました。その優美な姿から「山間の一大奇観」と称えられました。大正14年(1925)に建てられた「岳橋之碑」は、能古見の人々がその意義を広く後世に伝えようとしたものです。現在、三嶽神社の境内に移設されています。



激流に耐える巖橋



17 たい し ざんしょうこうじ かのんどう あと
大士山勝光寺(観音堂)跡

三嶽神社の対岸の、木庭川と本城川が合流する崖の上にある寺院跡です。3代藩主直朝の招きを受けた梁山禅師りやうざんぜんが開山し、現在は開山塔のほか法華経一字一石塔や墓地が名残として残ります。大士山八景として、ここから望む能古見の風光明媚な景観が詩に詠まれています。

「三岳夕照 吹野晴嵐 福源晚鐘 太良暮雪 池田落雁 貝瀬夜雨 三河秋月 江野帰帆」

明治6年(1873)には、この地に包蒙小学校が設立されました。(のちの木庭小学校→三河内小学校→知新小学校)



み たけ じんじゃ
19 三嶽神社



琴路岳(501m)は、別名を三嶽山(御岳)や藤の峰とも呼ばれ、その麓の本城川と木庭川が合流し中川となる場所に三嶽神社は鎮座しています。祭神は蔵王権現ざおうごんげんや吉野水分神よしの みくまりのかみとされ、由緒に多少の違いはあるものの、創建は奈良時代にまでさかのぼる、鹿島では最も古い神社の一つです。また、「藤津」という地名は、一説にはこの「藤の峰」(琴路岳)が起源ともいわれます。

三嶽神社は中川水系をつかさどり、古くから能美(能古見)郷の鎮守として崇敬されてきたことから、中川の下流に中宮として琴路宮、下宮として琴路神社が創建されました。天和2年(1682)に鹿島藩4代藩主鍋島直條のときに、三嶽神社と改められます。この年来日した朝鮮通信使に執筆してもらった扁額が現在も拝殿に掲げられています。

なお、10月下旬の例大祭では神輿の行幸が行われ、獅子舞も奉納されます。



み たけ じんじゃ し し まい
三嶽神社の獅子舞

鹿島市の獅子舞の獅子頭は、扁平で丸い仮面のような形をしています。このような獅子面は佐賀県西南部に特徴的にみられ、全国的にも珍しいものです。三嶽神社の獅子舞は、頭を深く沈めて舞うので「イモホリ獅子」という異名があります。奉納は、10月下旬の例大祭の際に行われ、「大木庭・東三河内・西三河内」「中川内・早ノ瀬・大野」「貝瀬・土穴・広平」がそれぞれ合同で請け村となり、3年に1回当番が巡ってきます。



ろくじょうがわ たか っ はらすいどう
20 鹿城川(高津原水道)

鹿島藩3代藩主鍋島直朝はさまざまな藩内の開発事業に力を注ぎました。その一つに水路と堤の建設による台地上の開発があります。寛文年間(1661~73)に建設が進められた鹿城川は、西三河内から水を取り入れ、東三河内〜大木庭と蟻尾山あへぶんの中腹を通って高津原台地上に流れ込む1本の水路です。この、幅約1.5m、全長約3.5kmに



およぶ長大な人工の川は、「高津原水道」「シード(水道)」の通称で知られています。現在でも現役の水路として活用され、人々の生活に大きな恵みをもたらしています。

なかがわち
中川内

馬場田、中尾、中村、山下、中島、井手口、垣ノ内、見渡、平原、野中、板ノ拓、掛橋、宇土、松尾、口無、笠井、中曽根、妙見、二反田、城平、妻夫岩、金原、割石、戸崎の24小字からなります。

福源寺は鹿島藩最初の黄檗宗寺院です。扁額は寛文9年(1669)に黄檗宗の高僧・即非そくひが書いたもの。

21 ふくげんじ おうはくしゅう
福源寺(黄檗宗)

鎌倉時代の弘安2年(1279)に建てられた滴水庵てきすいあんがその由緒と伝え
ますが、その後長らく荒廃していました。江戸時代の寛文9年(1669)、
小城出身の黄檗僧・梅嶺道雪ばいれいどうせつがこの地を訪れ、この地の由緒を惜しんで、
鹿島藩3代藩主鍋島直朝なべしまなおともの援助を得て寺を再興し、福源寺としました。

黄檗宗は、中国僧の隠元いんげんが承応3年(1654)に日本に伝えたもので、
当時最先端の禅宗として武家や大名家を中心に発展しました。福源寺
は、同じ黄檗宗で鹿島藩の菩提寺でもある普明寺ふみょうじよりも歴史が古く、鹿島藩や肥前における黄檗文化の浸透と発展に
大きな役割を果たしていたようです。お寺には今もなお、黄檗文化に関わる多数の書物が大切に守り伝えられています。



22 みょうけんぐう
妙見宮

天和3年

(1683)創建と
伝わりますが
由緒は不祥で
す。妙見菩薩や



妙見大神は国土の守護神で、北極星や北斗七星の化
身とされ武将の信仰を集めました。弘化3年(1846)の
三嶽神社の記録によれば、三河内村の大木庭、松尾、
山下に妙見社や妙見森があったことが記されています。

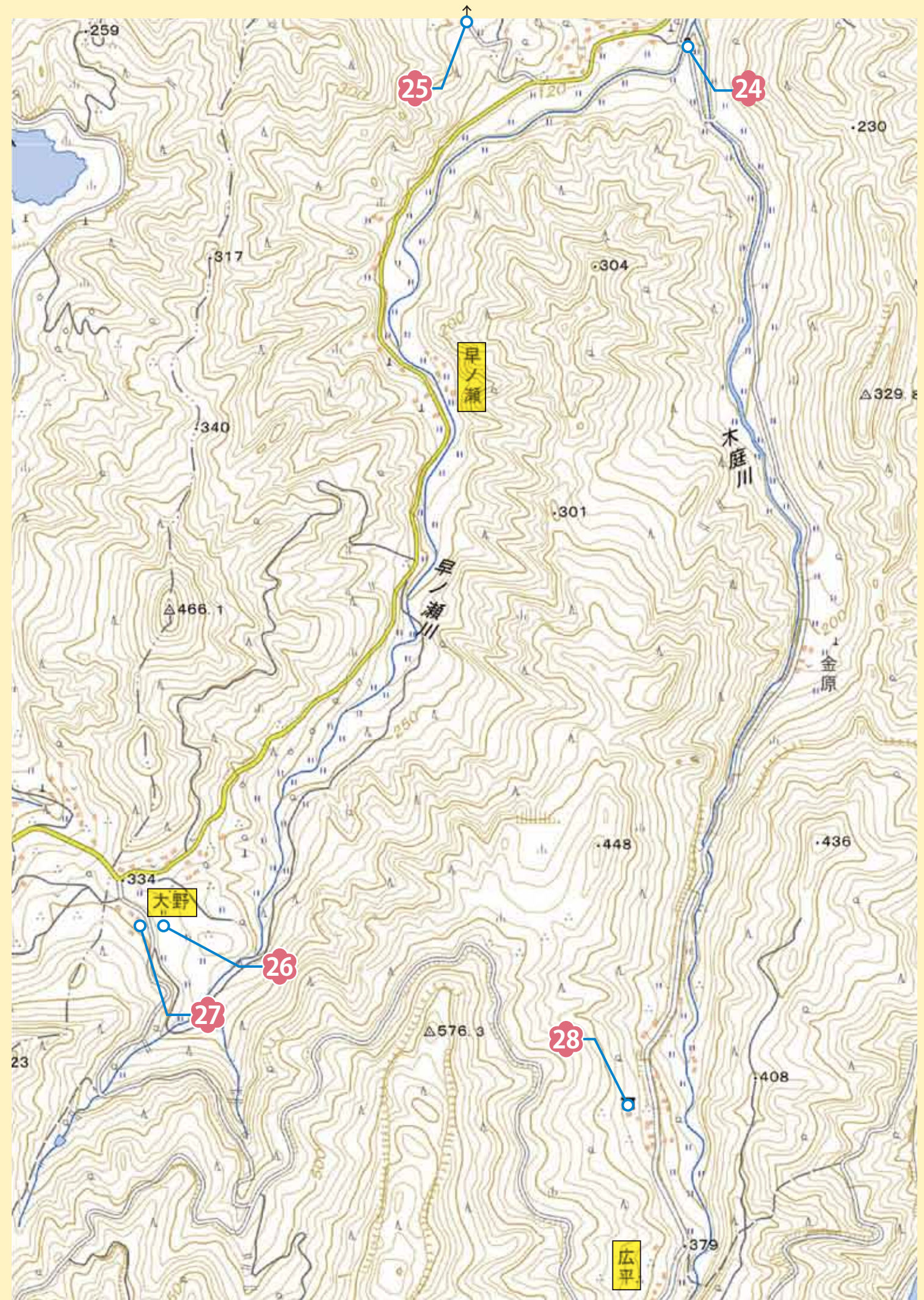
23 だいしどう
大師堂

山下の道沿いの岩穴の中に、地元の人がお大
師さんと呼んでいる所があって、木造の観音像と大
師像があり、
このほか三
界万霊塔、四
国八十八カ
所などの石
造物が祀ら
れています。



24 しち はちすいがいふっこうのひ
七・八水害復興之碑

川は、人々に豊かな恵みをもたらす一方で、時には、大規模な洪水によって、人々
の生命や財産を奪ってしまう存在でもあります。昭和37年(1962)7月8日の集中豪
雨で、水害が発生し鹿島市全域が大きな被害を受けました。木庭川と早ノ瀬川が合
流する中川内区でも、氾濫が発生し、大きな被害を受けました。中川内区の人々は、
その被害の様子とその後の復興の過程を永く後世に伝えるため、昭和41年に「七・
八災害復興之碑」を建てました。災害復興碑は地域における災害の実態と、それを
克服した先人達の努力を物語る貴重な石碑です。



はやのせ
早ノ瀬

黒岩、横竹、庵前、宝畑、狩集、宇土の6小字からなります。
この地域は鹿島藩の狩場であったことから狩集の地名
があります。その他にも、山浦城(原城)が落城した時の伝
説が多々残っており(宝畑)、それにちなむ字名(小字よりも
小さな単位の地名)もよく残っています。また、宇土とは細
長い谷の意味で、早ノ瀬の地形をよく現しています。

はやのせ たなだ
早ノ瀬の棚田



25 ことじだけ ことじだけじょうさいあと
琴路岳(琴路岳城塞跡)

標高501mの琴路岳(御嶽山)は三嶽山・藤の峰とも呼ばれ、中川
流域の鎮護としての性格を持っていました。山頂には小規模ながら
も曲輪や堀切が残り、中世の山城の痕跡が残ります。

琴路岳城塞跡縄張図



佐賀県の中近世城館第3集(佐賀県教育委員会2014)より

おおの
大野

昇立、檜椎川、持平、石堂、野田、屋敷上、谷深、大野、越露、瀬渡、井手上、本谷の12小字からなります。
江戸時代の資料で、鹿島藩日記や、佐賀本藩の史料に、「大野から砂金がでた!」という記録が残っています。

26 なべしま けしょうとくひ
鍋島家頌徳碑

鍋島直紹(鹿島鍋島家15代・佐賀県知事・
参議院議員)から、戦後に地区の住民へ山
林が払い下
げられた事
に感謝して
昭和32年
(1957)に
建てられた
記念碑です。



27 あみだどう
阿弥陀堂

もとは福源寺の末寺・護聖庵の跡地にあったものを、市道
改築の際に現地に移転したものです。お堂の前に、元禄8年
(1695)に建てられた金剛經一字一石塔が立っており、塔の下
の陶器の甕の中に金剛經を一石に一字ずつ書いたものが納
めてありま
した。大野の
集落の発祥
などを知る
うえで貴重
な資料です。



ひろだいら
広平

此角、隠木庭、矢嶽、大谷、竈岩、廣平、橋、蕪谷、越露、水無谷、勘場、硯石の12小字からなります。
鹿島藩3代藩主鍋島直朝が、元禄7年(1694)に本藩の光茂から、大野・中川内の山林を貰い、元禄9年(1696)に広
平山のほとりに家を作り、しばらく逗留して狩りをするなど、遊樂の根拠地としました。そこを地元では「お茶屋さん」と
呼び、現在の思瓊神社の場所であると伝わります。

28 おもにじんじゃ
思瓊神社

天保13年(1842)に造られており、鹿島藩3代藩主鍋島直朝(思瓊大神)を祀つ
た神社としては、市内で最も古いものです。直朝が元禄年間(1688~1703)にこの
地に狩りなどの遊興のための別荘(茶屋)を営んで、井堰や道路を整備し、水田を
造成してこの地の開発に力を
注いだことから、のちに思瓊神
社が奉祀されたと伝えられます。
直朝寄進の灯籠と手水鉢が残
っているほか、宝永4年(1707)
の山祇神の石祠と、正徳2年
(1713)の宗像三社命神の石祠
とが合祀されています。



なべしまなおとも じせき おもにじんじゃ
鍋島直朝の事績と思瓊神社

市内には「思瓊神社」あるいは「直朝神社」と呼ばれる神社が散在
し、地元では「じょうりこさん」として親しまれている事も多いようです。
これらの神社は、鹿島3代藩主の鍋島直朝を神として祀ったもので、
広平・筒口花木庭(花頂山)・高津原鷺の巣や重ノ木・鮎越にあります。
「思瓊」の名称は、直朝が死後、松陰神社に「思瓊大神」として祀られ
たことから、また「じょうりこさん」とは「紹竜公」がなまったもので、直
朝が隠居後に名乗った「紹竜」という号に由来します。

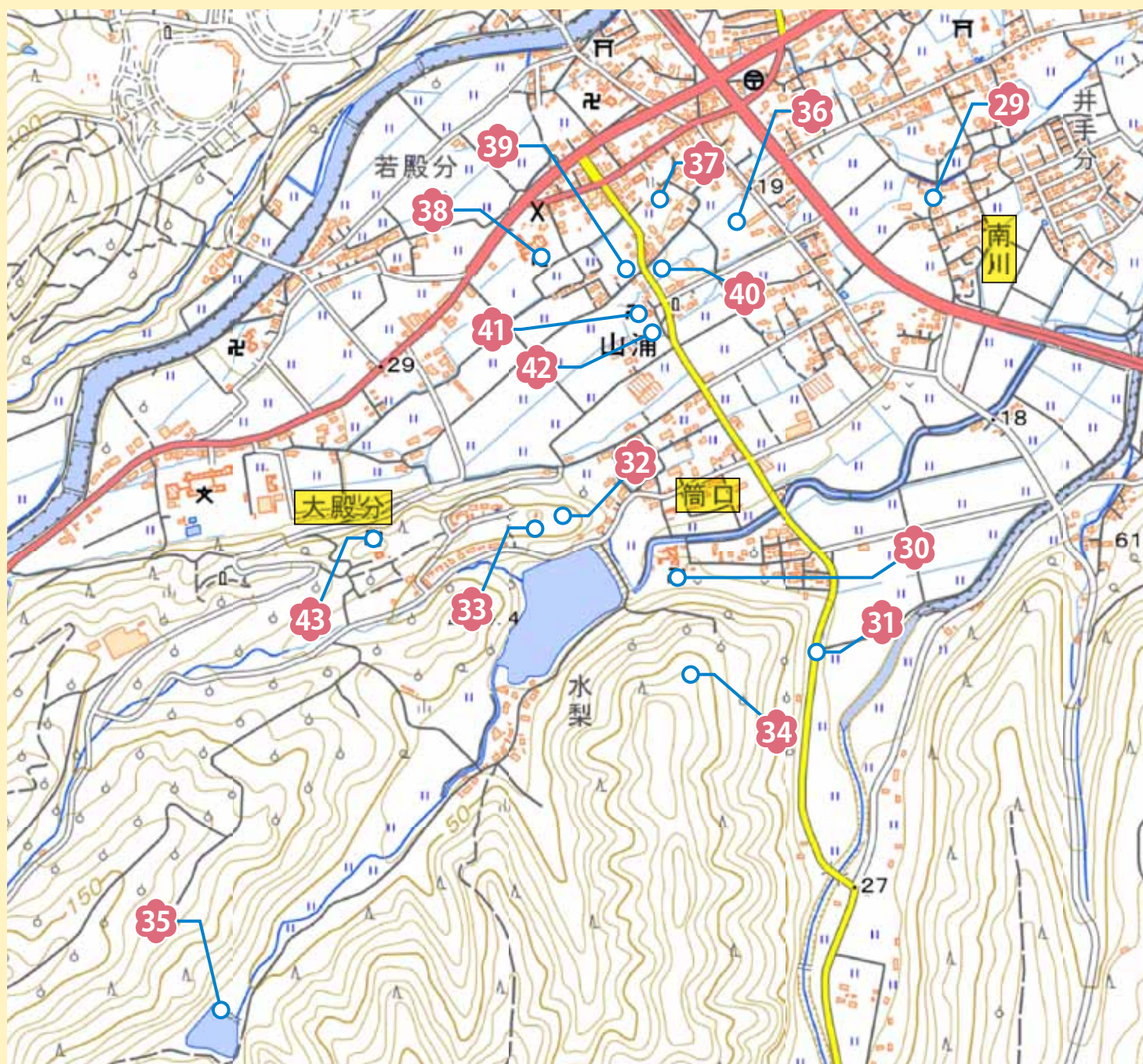
直朝は、藩内の産業の基盤整備に力を注ぎ、鹿城川や花木庭水
道・鮎越水道を開き、高津原や水梨・鮎越・諸干などに堤を築くことで
台地の開墾を進め、さらに有明海沿岸の干拓事業などを行ないまし
た。これらの水路や堤、干拓は、現代でも農業の基盤として活用され
ています。このように直朝の行った事業によって恩恵を受けた地区や、
直朝にゆかりのある土地には、思瓊神社・直朝神社などの社や石碑
が建てられています。



鍋島直朝像 ※普明寺蔵

【中川扇状地・中川～本城川・石木津流域エリア】 (南川・筒口・大殿分・貝瀬・土穴・本城・中木庭・川内・山浦・白鳥尾)

多良山系の河川の浸食作用によって生じた放射谷にある谷口集落の一つで、山浦の地名も谷口集落を意味しています。川にちなんだ地名も多いのが特徴です。また、地域にある龍ノ平、大ノ平、小川内、古木場、長野、内野などは、いずれも山間に開かれた新開地を示す地名です。この地域は古代最も早くから開けた所で、能古見郷の中心をなした所と考えられます。



大殿分・南川・筒口一帯は、中川の扇状地として古くから開かれた土地で、大昔の人が生活していた痕跡も残ります。これらは埋蔵文化財(遺跡)と呼ばれ、土木工事の際に見つかり調査されることがあります。主な遺跡として、不動遺跡・則重遺跡、大殿分山下遺跡など、弥生時代～江戸時代の人々の生活の痕跡が見つかります。

みなみがわ 南川

地神、馬場、吉丸、田中、南川、南宮、則重、正願、林田、若宮、銭竈、岩原、山王、天神、弥川内の15小字からなります。南川の構江にこの地を治めていた深江氏の菩提寺である「源昌寺」があります。また、鹿島・山浦線の構江路傍に「湯穴観世音」と呼ばれるところがあり、岩穴のところに梵字と卍が彫られています。

29 すわじんじゃ 諏訪神社

元和元年(1615)に深江氏(安富氏)が旧領であった南島原の深江から移し、山浦の氏神としたと伝わります。その後は老朽化が著しく、廃社となっていました。平成18年に改築されました。かつての鳥居の額束が御神体として祀ってあります。なお、佐賀藩の着座の家柄であった深江氏の広大な屋敷地は、この諏訪神社の北にあったと伝えられています。



30 げんしょうじ じょうどしゅう 源昌寺(浄土宗)

江戸時代に山浦村(南川・川内・山浦)および本城の一部を所有していた深江氏(安富氏)の菩提寺です。安富氏は鎌倉時代から深江(長崎県島原市深江町)を本拠としていましたが、天正12年(1584)龍造寺隆信が島原で島津氏・有馬氏の連合軍に敗れると、龍造寺氏に味方していた安富氏は藤津郡へ逃れました。安富氏は隆信の息子の龍造寺政家から深木村(現在の末光)に領地を与えられ、のちに山浦村と本城村の一部を領有することになりました。なお、安富氏はのちに姓を深江と改めます。寺の墓地には深江氏一族とそれに縁のある人々の墓が立ち並び、境内には、享保18年(1733)の「三界万霊六道四生等」と記された享保の大飢饉にまつわる供養塔があります。



31 いわあな くち ゆのあなかん ぜ おん 岩穴の口(湯穴観世音)

構江の道路沿い、崖の岩が露出した所に岩穴があり、中には湯穴観世音が祀られています。もとは弘法大師像があったといします。また、岩穴の入り口右の崖面には梵字と卍が彫り込んであり、周辺には六地藏と延宝2年(1674)の南無観世音菩薩の石碑が立っています。



きん ろ じんじゃ し しまい みなみがわ し しまい 琴路神社の獅子舞(南川の獅子舞)

南川地区に伝承されている獅子舞です。能古見地区にも氏子を持つ琴路神社の例大祭(11月2・3日)で奉納されます。上下左右に獅子頭を激しく動き回す所作から、あばれ獅子とも呼ばれます。「アババババイ」という独特の声と、威勢の良い掛け声とともに舞い踊ります。剣突き(剣遣い)が付随しているのも特徴です。



つつぐち
筒口

山下、筒口、不動、立馬場、飯田、大石、水梨の7小字からなります。

石木津川流域、山浦谷の出口に位置する集落です。花頂山（花木庭）のすぐ近く、水梨堤を望む標高約40mの南側斜面に煙硝ぐら古墳があります。「煙硝ぐら」の名称は、江戸時代に鹿島藩の煙硝（火薬）の貯蔵庫として使用されていたことに由来します。『鹿島藩日記』によると「水無堤煙硝蔵心遣」という役人をおいていた記録が残っています。

32 かちょうざんやかたあと はな こ ば おも に じんじや
花頂山館跡(花木庭思瓊神社)

花頂山は、花木庭山とも呼ばれている小高い丘です。
なべしまなおとも
 鹿島藩 3代藩主鍋島直朝は領内の基盤整備を積極的に
みずなしつつみ
 進めましたが、花頂山の眼下に広がる水梨堤もその一つ
けいあん
 で、慶安3年(1650)に築造されました。直朝は藩主を息
なおえだ えんぼう いん
 子の直條に譲ったのち、延宝6年(1678)に、この地に隠
きよ
 居館を構えました。



びわこ ちくぶじま
堤を琵琶湖に見立てて竹生島をおき、そばの小丘を丸

あたご かんじょう さくらみね ちんれいかく げけいあん
山、南の山を愛宕山として頂上に愛宕神社を勧請しました。また近くの丘を桜峰と称し、一帯には「鎮嶺閣」「月桂庵」

けんしょうじ そげんあん ふうこうめいび
「見性寺」「曹源庵」などの建物もあって、風光明媚な様子を当時の絵図が伝えています。

実はこの花頂山は、藩主が不在の折には、代わって藩政を執りしきる機能も持っており、さらに有事の際には城郭としての軍事利用を想定した設計がなされていたことが、その構造からうかがえます。

現在は、13代藩主直杉が明治29年(1896)に直朝を祀った「思瓊神社」の石祠があり、神社の境内となっています。



自花頂岩泉江御寄付之山絵図 元禄16年(1703)

※祐徳博物館蔵

えんしょう こふん
33 焰硝ぐら古墳

花頂山のすぐ近く、水梨堤を望む標高約40mの南側斜面に造られた古墳です。

6世紀後半の築成と推定されます。現在は大部分が破壊され、巨石を組んだ石室せきしつの一部が残されていて、その名残をとどめています。「焰硝ぐら」の名称は、江戸時代に鹿島藩えんしやうの焰硝（火薬）の貯蔵庫として使用されていたことに由来するもので、『鹿島藩日記』によると「水無堤焰硝蔵心遣」という役人をおいていた記録が残っています。



34 あたご じんじゃ
愛宕神社

き がんしょ ふんし
鹿島藩の祈願所として、京都の愛宕神社を分祀し水
まつ
梨堤の南方の山上に祀ったものです。参道入り口にあ
がつか あたご だいごんげん げんろく
る鳥居の額束「愛宕大権現」は、元禄 3 年 (1690)、鹿
なべしま なおとも
島藩 3 代藩主鍋島直朝の書によるものです。代々の
しんぼう
藩主の信奉も



あつく、のち
に大天狗の石
祠を祀り奥の
院としました。

みずなししんつつみ
35 水梨新堤(上溜池)

文化7年(1810)、鹿島藩9代藩主直彝なおのりの代に築造されました。また堤の南西の山中には、享保10年(1725)に能古見郷八カ村水利組合が願ひ出できょうほうすいてんぐう勧請された水天宮の社殿があり、中に石祠が祀つてあります。



36 せんしよくしりょうかん 染織資料館・のぐみ人形工房 にんぎょうこうぼう

せんしよく なべしまさら さ すず たる じ
染色工芸家で鍋島更紗の解明と復元に携わった故・鈴木昭次氏が収集

した染織に関する資料を集めた資料館です。鍋島更紗とは、江戸時代から佐賀に伝わる染織品ですが、その技法は近代化の波に押され大正初めに途絶えてしまいます。鍋島更紗を復元するために鈴田照次氏が世界各国に調査へおもむき、そこで集めた資料のほか、鈴田照次・鈴田いげと もくはんずり さらさ 滋人親子の木版摺更紗の作品などが展示してあります。




佐賀県を代表する郷土玩具である「のぐみ人形」の工房を併設しています。

もくはんずりさら さ すず た しげ と
木版摺更紗(鈴田滋人)(国重要無形文化財保持者・人間国宝)



鈴田滋人氏は、昭和29年(1954)生まれ。木版と型紙を併用する「鍋島更紗」の制作技法の研究と復元に力を注いだ父(故・鈴田照次氏)の後を受け継ぎ、昭和56年(1981)から「木版摺更紗」の研究と錬磨を重ね、その技法を高度に体得し、独自の作風を確立しました。

鍋島更紗は半兵衛更紗とも呼ばれ、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、鍋島直茂が連れ帰った高麗人の九山道清によって創始されたと伝えられています。

この技法は、木版と型紙を使う独特のもので、佐賀鍋島藩の保護のもとで受け継がれ、その製品は藩主からの献上品や贈答品として使われるなど、「和更紗」のなかでもきわめて格調高いものとして位置付けられます。近代に入ってその技法は、いったん途絶えましたが、鈴田照次氏の努力により昭和40年代に復元されました。



てんまんぐう
37 天満宮

木造のお堂内に天満宮と書いた石祠があります。



さいしゅうじ じょうどしんしゅう
38 西宗寺(浄土真宗)

開基は永禄年間

(1558~1569)で、元和7年(1621)に

現在地に一寺が建立されました。境内には樹齢300年を超える

と推定される佐賀の名木・古木指定のイチチョウの大木があり、また、春になると入り口にあるしだれ桜が見事です。



おおとのぶんやかたあと
39 大殿分館跡

蓮蔵院の北側にある、約60m四方を土塁に囲まれた館跡で、大屋敷(うーやしき)という地名も伝わっています。土塁上には鎌倉時代以降の石塔が散在しています。仁和寺の荘園であった藤津荘の管理に深く関わった在地の有力者の館跡と考えられ、室町時代の藤津大村氏の館跡という説もあります。



つつぐちやました ちゅうせいせきとうぐん
40 筒口山下の中世石塔群

筒口の狭い道端に集積されていた

石塔群で、鎌倉時代中期~室町時代後期の宝塔・五輪塔・宝篋印塔などの残欠、さらに室町後期から江戸時代前期の板碑で構成されます。特に注目されるのは、宝塔の塔身部分(1200年代半ば)、五輪塔の水輪部分(1200年代後半~1300年代前半頃)、さらに、天文11年(1542)の銘がある有耳五輪塔です。

蓮蔵院一帯にあったとされる金剛勝院を宗教的背景としながらも、不透明で複雑な市内の中世社会をひもとく上で有用で、石造工芸としても価値が高い貴重な資料です。現在は、蓮蔵院墓地に移設されています。



はちまんしゃ
42 八幡社

蓮蔵院のすぐそばにあり、宇佐八幡の分霊を勧請したと伝わります。



れんごんいん しんごんしゅうおむろ は こんごうしょういんすいていち
41 蓮蔵院(真言宗御室派)※金剛勝院推定地

平安時代、鹿島・

藤津地方の大部分は京都仁和寺の荘園(藤津荘)となりました。仁和寺は、藤津荘の役所を兼ね

てこの地に寺院を整備し、僧侶や役人を派遣することで荘園を管理しました。蓮蔵院もこのような背景で建てられた寺院の一つであったと考えられます。

当時は、蓮蔵院を中心とする場所に、金剛勝院という大規模な寺院が整備されており、古記録では「仏殿を作り、講堂、鐘楼、大門、中門みな備わる、大門の外に道をはさんで12の子院あり。」とあります。金剛勝院は戦国時代の兵火により廃絶しますが、一帯には院(犬)の馬場、坊中道、不動、金剛、伽藍、堂の上、学頭、浄願、八大竜王などの地名が残ることからも、往時の盛況さと寺院規模の壮大

さを偲ぶことができます。蓮蔵院には、阿弥陀如来座像2体、薬師如来座像1体の計3体の仏像が残されており、国の重要文化財となっています。平安時代末期の作で、九州では他に類例のない定朝様式の本格的な仏像であり、12世紀頃にこの地に花開いた一大仏教文化の証です。蓮蔵院には、このほかにも多くの文化財が所蔵されています。



江戸時代(1703年)頃の見性寺

けんしょうじ そうとうしゅう
43 見性寺(曹洞宗)

3代藩主鍋島直朝と萬子(祐徳院)の子・式部朝清が若くして亡くなった事を哀れみ、その霊を弔うために建てられたお寺です。大木庭にあつた三間寺が廃寺となっていたものをこの地に移し、朝清の法名である「見性院」から、改めて見性寺としました。



46 いわ や かのん
岩屋観音



50 じょうどやま
浄土山



かわち
川内

焼山、権現、長日、多々羅、
今才、阿弥陀、羊鹿、谷田、
横谷、千石、坂本、東、西の
13小字からなります。

川の浸食作用によってで
きた谷口集落で、千石という
地名は、昔は千石の船が川
をのぼってきたことにな
みます。

44 だいにちによらいどう
大日如来堂

川の左岸の山すそにある
石組みのお堂です。南北朝
時代～室町時代(14～15世
紀)の作と考えられる木造の
大日如来像が祀られていま
す。この場所には以前、享保
16年(1731)年寄進の鳥居
があり「法界宮」とも呼ばれていたようです。法界とは真言密教で全宇宙を意
味する言葉ですが、鳥居のある神社に仏像が安置されていて、神仏習合の様
子がうかがえます。



45 あみだどう
阿弥陀堂

堂内に多数の石
碑や石祠が集めて
祀っております。そ
の中に宝永2年
(1705)の天満宮
石祠があることか

ら天神さんとも呼ばれているようです。このほか、天正13年(1585)
の逆修冥福碑、安永2年(1773)の猿田彦太神碑も祀られています。



いわ やかのん
岩屋観音のイロハモミジ(市天然記念物)



岩屋山興法寺の境内には、
高さ20.5m、幹回り3.3m、枝
張り21.5mのイロハモミジ
の巨木が枝を広げています。
樹齢は、350年以上と推定さ
れ、佐賀県が指定している
「佐賀県の名木・古木」の中
でもモミジの中では2番目
に古い古木です。「さが名木
100選」にも選ばれています。

46 いわ やかのん いわやさんこうほうじ
岩屋観音(岩屋山興法寺)

江戸時代に書かれた「鹿島志」や「岩
屋物語」によれば、真言2世の祖である
龍猛菩薩がこの地に現われて開山した
とか、弘法大師が唐へ渡る途中にこの
地で修業したという伝説が伝わります。
さらには、鹿島出身の高僧・興教大師覚
銭が修行したとも伝えられています。

岩屋山は平安時代より真言密教の道
場として開かれ、古くから蓮蔵院あるい
は金剛勝院の奥の院としての性格を持
っていたものと推定されます。当時は、
12坊の寺があったといわれます。江戸
時代以降は、観音信仰の霊場として庶
民の信仰を集めました。境内には多数
の石仏・石造物が安置され、登山道に
は町石仏などが寄進されています。

庶民信仰としての岩屋観音の姿と、
山岳仏教の道場として栄えた昔の名残
を留めている霊場で、この岩屋山にま
つわる貴重な文化財も数多く残されて
います。

いわ や さんこう ほう じ せきぞうによらいぎょうざ ぞう せきぞうじゅういちめんかんのんぼ さつ ざ ぞう
岩屋山興法寺石造如来形座像・石造十一面観音菩薩座像
 (市重要文化財)

岩屋山興法寺に伝わる石造物で、長崎県そのぎの彼杵で産出する滑石かつせきという加工が容易な石材で作られています。十一面観音菩薩像は本来宝塔ほうとうであり、その塔身部分のみが残っています。これらは平安時代の作で、美術工芸品としても優れています。



いわ や さんきょうづかしゆつどい ぶつ
岩屋山経塚出土遺物
どうせいきょうづつ かつせきせいがいと う し ほんきょうもん
 (銅製経筒1個・滑石製外筒1個・紙本経文1巻) (市重要文化財)

岩屋山興法寺の境内から大正8年(1919)7月に発掘された、経塚出土遺物です。経塚遺物は事例が少なく、経文が残存しているのは県内でも数例です。これらの遺物は、平安時代末～鎌倉時代に盛んに行われた経塚築造の歴史を研究する上で重要な資料で、当時の工芸品としても価値があります。



いわ や さんこう ほう じ わにくち
岩屋山興法寺鰐口(11個) (市重要文化財)

岩屋山に伝わる鰐口わにくち(仏具の一種)です。江戸時代の寛文5年(1665)～天保4年(1833)までの8個と、無銘の3個の計11個です。銘文によれば、佐嘉・有田いずみやまの泉山・鹿島新町や筑後国からも寄進されており、江戸時代の岩屋山が観音信仰の霊場として広く信仰を集めていたことがうかがえます。



やまうら 山浦

川原田、長谷、浄土、野口、合角、引地、地藏、大ノ平、中山、大谷、古木庭、長野、内野、古木の14小字からなります。山浦とは、谷口集落を示す地名で、大ノ平、古木庭、内野など、いずれも山間に開かれた新開地を示す地名です。浄土山じょうど やまの頂上にある浄山の碑は、13代藩主直彬なおよしの書と伝わります。

47 のぐち どう 野口のお堂

つくよみ みこと
 月読の命、
 わにくち
 鰐口ほか



48 てんじんじゃ てんまんぐう 天神社(天満宮)

山浦の地を領した深江氏ふか えが寄進した鳥居けんろく(元禄5年1692年)が残っています。神社の北側は深江家の屋敷地(隠宅)があった所です。明治19年にはこの天神社を仮校舎として山浦簡易小学校が設立されました。のちに深江家から屋敷地の寄贈を受け山浦分教場の用地となりました。

境内近く
 の道路沿い
 には、太神
 宮碑・山神
 宮祠・猿田
 彦大神碑な
 どが祀って
 あります。



49 びくさん 比丘山 (山浦教会所)

かくばんしょうにん
 覚鑑上人にゆかりのお
 寺である誕生院(行成区)
 の奥の院となっており、つ
 ぎのような伝説があります。
 「昔、八百比丘という人が
 いた。錫しゃくを持って、一つ歯の下駄しお いを履いて、潮井川で水をくんで禳みそぎぎをして、毎日様々なところに修行をして回っていた。行成に隠棲していた元九州探題の伊佐平次兼元を訪れて、当時7、8歳だった弥千歳丸や ちとせまる(のちの覚鑑上人)を教化し、弥千歳丸は仏門に入った。そのため、この八百比丘は人々の間で有名になった。」



しらとりお 白鳥尾

多々良、龍ノ平、七美谷、小川谷、下黒内、上黒内、才又、多布木、一本松、七曲、鉾扮、榎谷、坂山、開花、東河内の15小字からなります。

き おん の ひ まつもとだいきちしょうとく ひ 紀恩之碑(松本代吉頌徳碑)

能古見地区の近代教育は明治6年(1873)に3つの水系沿いに小学校が設立されたことにはじまります(東三河内・川内・浅浦)。当初の小学校は教育費が自己負担で、子供達も家庭の労働力に位置づけられていたため、就学率は高くありませんでした。

そうした中、地域社会の側から教育を支えたのが松本代吉(1858～1942)です。代吉は、40年間もの間、毎年正月に山浦・川内・白鳥尾の子供達に文具を贈り、家庭の経済力に関わらず、すべての子供達が安心して教育を受けられる環境を作り続けました。こうした代吉の学恩を受けた人々は、大正15年(1926)に山浦天満宮に「紀恩之碑」を建て、その功績を後世に伝えようとしてしました。



50 じょうどやま じょうざん ひ 浄土山(浄山の碑)

標高503mの山頂近くに、3代藩主なべしまなおとも鍋島直朝がこの地を訪れた際に雨宿りしたと伝わる雨宿り岩や「浄山」と浮き彫りされた巨大な岩があります。13代鍋島直彬なおよしがこの山を訪れた時に、祖先の事を思い、筆で大書したものと伝わります。能古見の山々は山岳信仰をはじめとした信仰の山でもあり、浄土山という名所もこのような背景からきているものと思われます。

51 こんげんどう 権現堂

きん ろ 琴路神社の分社として奉祀され
 ていて、ほこそぎ さかやま
 鉾扮、坂山の両地区の氏神として、両区で管理しています。





かいぜ 貝瀬

松ノ原、峰、内籠、才上、北貝瀬、諸星、南貝瀬、眞崎、和田丸、河原の10小字からなります。

江戸時代は、本城河内村の一部でした。貝瀬の「貝」はおそらく「峡」のことで、山と山に挟まれた瀬という地形をあらわす地名と思われるます。

はなこばすいどうしゅすいぐち 53 花木庭水道取水口

花木庭水道は鹿島藩3代藩主鍋島直朝によって設けられました。取水口は本城川から上・下の2本取られています。水路は貝瀬の集落を抜けて、途中で合流し、花木庭の台地上を横切って筒口の水梨堤に水を運んでいます。



つちあな 土穴

吹上、長野、堂園、土穴、中島、上坂の6小字からなります。

全国的に見て、土穴という地名は、「土蜘蛛」と呼ばれた大和政権に服従しない土豪に関係するところが多く、この字名もそれに由来すると思われるます。また、江戸時代、正保国絵図(1640年代作成)には堂園村という村が存在し、土穴村一帯に比定されます。近世末期に土穴村は貝瀬村と統合されて大川内村となりました。

やまじんぐう 55 山神宮

木造のお堂の中に、山神の石の祠が祀っております。



てんまんぐう 52 天満宮

由緒では延宝6年(1678)に藤原清房らによって創建されたと伝わります。貝瀬の天満宮には、平安時代のもと思われる宝塔の残欠(笠石)が伝世していました。



たかみ 54 田の神

田んぼの真ん中に石祠が祀られています。



きょうどうせいはいくしょ 56 共同精白所 (水車小屋)

本城川から引き込んだ水路わきにある水車小屋です。水車はタービン式で、螺旋の鉄製羽根をおさめたパイプに水を引き込み、水流で羽軸を回転させ、臼を突いて脱穀や精米、製粉などに使います。地元の人達に大切に守られ、90年以上経った今でも現役の水車です。



じゅうさんぶつ
57 十三佛

浄土山の西側斜面の岩をくりぬいた洞窟内に、四国42番～54番まで計13体の仏像を祀っております。洞窟前にある石塔によれば、明治43年(1910)に長崎出身の尼僧がこの地を開山し、新四国88力所巡りの石仏は貝瀬の石工・中尾松五郎が制作したことを伝えています。



ほんじょう
本城

白仁田・船坂・大平・松ノ坂・小川内・城平・尾崎・雨越・貝手・上床の10小字からなります。

地区の西方にそびえる城平山頂に天文年間(1532～1555)原豊後守氏長が築いたと伝える城跡があり、本城の地名もこれにちなむといわれます。現在も庚申講が行われており、民俗学的にも貴重な地域です。

やまうらじょう はらじょう の ご みじょう
58 山浦城(原城・能古見城)

西藏寺の背後にそびえる標高330mの山頂に築かれた戦国時代の山城跡です。本城という地名もこの城の存在に由来します。一帯には城山・城平などの地名が残り、山頂まで城道と呼ばれる山道が続いています。麓には原氏の屋敷や墓との伝承がある場所もあり、江戸時代後期の絵図では原豊後守城跡と伝えています。山頂には昭和10年(1935)建立の「原城址」の石碑が建っています。

城跡は急こう配の断崖で、天然の要害となっており、曲輪、堀切、石垣、竪堀等が良好に残っています。その規模は南北360mもあり、鹿島・藤津地方では蟻尾城に次ぐ大きさで、県西部地域最大級の「総石垣造り」の中世山城です。築城の経緯は不明ですが、文明9年(1477)には大村家親がこの城を拠点としており、その後、戦国時代(16世紀中頃)になって大村氏の一族である原氏の城とな

ったと伝わります。なお、現存する城の規模と構造から、戦国時代末期には龍造寺氏や有馬氏などの大名勢力によって整備・拡張が行われたと考えられます。



縄張図

※佐賀県の中近世城館 第3集(佐賀県教育委員会 2014)より

すいぼくが うんこくとうがん
～能古見が生んだ水墨画の巨匠～雲谷等顔(1547年～1618年)

雲谷等顔は本名を原治兵衛直治という武家の出身で、天文16年に肥前国藤津郡能古見城主、原豊後守直家(尚家)の次男として生まれたと伝えられています。京都で絵師としての修行に励み、のちに戦国大名で長州藩祖の毛利輝元に召抱えられます。輝元から日本水墨画を大成した、画聖・雪舟の「山水長巻」と雪舟の旧居「雲谷庵」を与えられ、雪舟の正当な後継者に指名されました。

雲谷等顔は京都や山口・萩などを中心に活躍し、多くの作品を残しています。等顔は、後に続く「雲谷派」の祖であり、狩野永徳、長谷川等伯、海北友松など、同時代に活躍した絵師達と並び称される桃山画壇の巨匠です。



「山水図屏風」六曲一双(重要文化財)



※東京国立博物館蔵

さいざうじ りんざいしゅう
59 西藏寺(臨濟宗)

創立は永享年間(1429～1440)と伝えられています。江戸時代後期の寺社差出によれば、中興開基は鍋島信房の妻で、鍋島直茂と鍋島信房の菩提を弔うため再建したと伝わります。また、墓地の一角に「前主林当中興養翁口和尚、時寛永三丙寅伯五月初二日」と記された墓塔があつて、寛永3年(1626)に没した養翁が中興となっている事が知られます。寺の背後には山浦城があり城道が山頂へと続きます。その立地関係から城主の原氏の守護寺(氏寺)であった可能性もあります。



こうしんとう
60 庚申塔

西藏寺の境内の一画に、天正18年(1590)～平成23年(2011)にかけて造立された12基もの自然石の庚申塔が並んでいます。中世末期から現代にいたるまで、庚申信仰が受け継がれてきた証であり、このように特定の1カ所に庚申塔が集中して残っている例は他に無く、庚申信仰の変遷を知る上での貴重な資料です。本城地区では、今でもこの行事が行われていて、60年に一度、記念碑が建てられています。



こうしんこう 庚申講

庚申講は、庚申の日に神仏を祀って徹夜をする行事で、日本では平安時代から行われていました。人間の体の中には、三戸^{さんし}という虫がいて、庚申の日に眠ると、この虫が体から出て、天帝^{てんてい}に悪事を告げると信じられていました。そのため、庚申の日にみんな徹夜したといひます。

「庚申」は、えと^{えと}の組み合わせの一つです。十干^{じっかん}（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）と、十二支^{じゅうにし}（子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥）を組み合わせると全部で60種類の組み合わせができます。その一つが「庚申」（かのえさる、コウシン）です。これを暦^{こよみ}に当てはめると、60日ごとに庚申日が訪れ、60年に一度庚申の年が巡ってきます。

ちなみに、かんれき^{かんれき}の祝いは、この60の干支の組み合わせが一巡したことを意味しています。

ほんじょう にんぎょでんせつ ～本城の人魚伝説～

「本城の人々は、こうしん^{こうしん} ざる た ひこ^{ざる た ひこ} あつ^{あつ}（庚申神（猿田彦神））を篤く信じていて、毎月庚申祭を行っていた。ある夜現れた老人を仲間に入れたところ、次回の庚申の日、老人から案内の使いがきた。約束通り皆が行くと、老人の家は富豪で、たいそう皆をもてなした。この時、赤子のようなものを料理していたのを見た人々は、皆で示し合わせて、これを袖に入れ、帰り道路傍に捨て、家に帰った。此の時、一人だけ酔ってその品を捨てることを忘れ、自分の家へ持ち帰ったものがいた。家に着くと、娘が出てきて、「お土産は？」と言いながら、父親^{そで}の袖を探り、袖に入っていた肉を食べてしまった。実は、この肉は、庚申神から頂いた長生きする魚類人魚の肉であった。その娘は、その後蓮蔵院の僧の元^{れんざんいん}に入門し、尼^{じようど}となって、浄土山に住み、800歳まで生きたという。や お び く に^{や お び く に}（八百比丘尼）。この尼が住んだ跡は、浄土山比丘谷と呼ばれている。この尼が一つ歯下駄を履いて、毎日山からおり、潮湯で禊をしたことから、その川を「神水川」と呼ぶようになったという。」

61 やまじん じゃ 山神社

祭神は山岳を神格化した大山祇神^{おおやまづみのかみ}で、山・田・水の神として信仰を集めます。また境内に「ししきさん」とよばれる神様も祀っています。もとは川の少し上流で「四食社」として祀ってあったものを移したものと考えられます。



62 た ら だけじん じゃ ごんげん 多良嶽神社（権現さん）

多良岳権現を祀った神社で、明治3年には村社となり、すうけい^{すうけい}崇敬者1万戸であったと大正時代の記録が伝えています。ほうれき^{ほうれき}2年（1752）の銘がある鰐口^{わにくち}があり、本城の笠告角太夫^{かさつかく たゆう}の奉納^{ほう}によることが分かります。



なか こ ば 中木庭

大坂、路木、柿原、中木庭、縫形、大野、丸木庭、四方坂、張川内、平谷、弓木の11小字からなります。

現在、中木庭ダムができたため、中木庭天満宮は平成11年（1999）に現在地に移転しましたが、ご神体の石祠は堂々たるものでてんぽう^{てんぽう}15年（1844）の銘があります。また、平谷温泉はれいせん^{れいせん}冷泉で、江戸時代後期よりとうじば^{とうじば}湯治場として知られていました。

63 てんまんぐう 天満宮

中木庭ダム建設による集落の水没に伴い、平成11年（1999）に、上流の現在地に移転されました。社殿は新築され、鳥居^{とりう}や灯籠は水没予定地から運ばれ、この地に再建されました。



なか こ ば ひぜん おど 中木庭肥前タヌキ踊り

毎年9月25日に天満宮のお祭りで披露されます。平谷温泉が発見された際、湧き出た温泉を自分のものにしたいタヌキの国とキツネの国が、争いを避けるため、秋祭りで天神様へ舞を奉納し決着をつける事になった…という民話にちなんだユニークな踊りです。



64 ひらたにおんせん 平谷温泉

きょうがだけ^{きょうがだけ} 経ヶ岳登山口近くに湧く温泉です。わ^わ 「肥前耶馬溪」と呼ばれる谷あいの景勝地あり、ひぜん や ばけい^{ひぜん や ばけい}紅葉の名所となっています。源泉は、白糸の滝のそばにあって、江戸時代後期から武士や庶民のとうじば^{とうじば}湯治場として利用されていたものと思われます。かえい^{かえい} 嘉永元年（1848）の絵図には「湯壺」とあります。現在も県内外からの湯治客でにぎわっています。



鹿島名所絵葉書「平谷温泉白糸の滝」（昭和30年代） ※佐賀県立図書館蔵